

## 読書通信



No. 113

① 最近の安倍首相の顔つきは祖父・岸元首相の背後霊にがちり抑え込まれたかに思えてきた。特定秘密保護法から集団的自衛権、集団安保への前のめり姿勢を見る限り、8月15日にはまた靖国に参拝して中韓との関係はますます厳しさを増すのではないか。半田滋『日本は戦争をするのか』(岩波新書、799円)は、安保法制懇や日本版NSCなどを着々と立ち上げ憲法解釈で周辺有事に備えようとする安倍首相の心情と作戦を詳細に分析している。

著者は東京新聞論説委員で永く防衛問題を担

当してきた。その報道姿勢は端的に言って安倍首相の立場とは相容れないもので、むしろ歴代自民党政権が憲法9条によって自衛隊の活動にタガをはめてきたことを高く評価している。そして自衛隊が国内外でインフラ支援や災害対応など非軍事行動に実績を収めてきたことこそが理想的な自衛隊像であるとされる。

特に終章の「逆シビリアンコントロール」は多年の取材が詰まっついて説得的だ。実は日本の政治家たちは自衛隊の活動には関心を失う一方だという。「勇ましいことをいう政治家やマスコミは、シビリアンコントロールの自覚をしっかりと持ってもらいたい」。自衛隊幹部のこの言葉は「おかしな日本」を端的に示している。

② 原発事故避難の福島の人たちも大変だが、

宮城を中心とする津波被災の人たちの厳しさもいっこうに収まっているわけではない。今野晴貴『断絶の都市センダイ』(朝日新聞出版、1620円)によると、義援金を吸い取られ、復興予算は素通りし、実際には働けない求人があふれ、そして「楽をしている」「自立せよ」という厳しい視線が突きささる。NPOでの支援活動の中から見えてきたブラック国家のありようを著者は鋭く告発しているが、震災直後に今こそ絆だと心した人は、今あらためて本書の問い掛けに耳を傾けてはいかがかと思われた。

③ 新聞、テレビなどオールドメディア(オワコン、終わったコンテンツ)というのだそうだが、経営は厳しさを増している。対するネットメディアはどこまで伸びるのか、また問題点の数々

はどう克服されるのか。長澤秀行編著『メディアの苦悩』(光文社新書、885円)はさまざまなメディアのトップ28人へのインタビューで構成した、まさに苦悩するメディアの現在とこれから。ただし、ネットメディアに奢りの気配を感じたのは僻目か。コンテンツの勝負ならまだとても終わってなどいないのでは。

④ マイケル・ブース『英国一家、ますます日本を食べる』(亜紀書房、1620円)は破天荒な食日記で今回も期待を裏切らない。カツオ節、ワサビ、ウニ、フグ、高野山の精進料理から沖縄料理(親子で蛇料理も!)まで日本中を挑戦して回る。イギリス人ならではの日本文化観も面白いが、温かいまなざしと恐るべき好奇心にいつしか心がなごみ同期化してくる。(純)